

ヤスクニ・レポ 166
「侵略日本、抗戦中国*」の歴史を学ぼう
代表 西川重則

1

安倍首相が日本の戦後の歴史についてよく知られている文言がある。「戦後レジームからの脱却」である。言うまでもなく、それは安倍首相の思想そのものであり、日本の戦後史からの脱却を強く望んでいることの表明である。そしてそれは私たちの戦後史・歴史観は間違っているとの前提であり、最高の権力者として、私たちの歴史観の是正を強く求めていると言ってよい。私は氏の間違いを糾弾したい。

「戦後レジームからの脱却」のひとつは、たとえば、日本が中国を始めアジアの国々と敵対して戦争を始めたことをめぐって、戦後68年の今も、侵略戦争だったのか自衛戦争だったのかをめぐって、根本的に意見が分かれている。安倍首相の国会などでの発言からは、日本が侵略したことは認めていないように思われる。そうした重要な歴史認識について、私は戦後68年の(8・15)を前に、改めて事柄の重要性を痛感させられている。

言うまでもなく、近い国の中国や韓国などとの関係を重要視すべきことを真剣に思い、そして具体的にはそれぞれの国の方々と尊敬し合い、人格的な交わりを深めることの大切さを具体的な形で表明できたらと強く考えている昨今である。

そうした思いを持つ私はここで、たとえば日中両国の学者が長い間、日中歴史共同研究に力を尽くし、発表するに至ったすばらしい事例を紹介したい。歩平氏(中国側座長、中国社会科学院近代史研究所長)と北岡伸一氏(日本側座長、東大法学部教授)とが、次のような貴重な共通認識を持つに至ったことを、私は知らされている(「朝日新聞」、2010・1・29)。

「重要な議論をいくつか挙げれば、日中戦争の性格が『中国に対する侵略戦争だった』という点で一致し、……その事実を双方が確認し合ったのは大きなポイント」。

類似の重要な指摘をされた韓国の方の発言、すばらしい問題提起を報告したい。岩波新書の小池健治・西

川重則・村上重良編『宗教弾圧を語る』、220、221頁、私の質問に対する韓国人の答えである。

「まず申し上げたいことは、今後日本人が自己の歴史を再検討される場合に、自己を見つめるだけではだめだということです。なぜなら、自己を見つめるだけでは何も出て来ませんから。展望は、他者との関係のなかでだけ出てくるものです。そういう意味で、関係は鏡だと思います。朝鮮の植民地支配の歴史のなかで、日本が果たしたものは何であったかを、関係のなかで徹底的に考え直してみることが、日本の今後のために絶対に必要なのです。……いくら天皇制を問題にしても、日本人のなかでだけ学んでみても、その問題の深さがよく見えないのはむしろ当然でしょう」。

言われる通り、「関係は鏡」である。韓国の教会に招かれて、礼拝の奉仕の後、50歳以上の女性の方々が異口同音に、神社参拝を強制され、日本人からひどい目に合ったことを証言されたことを私は忘れていない。

韓国併合期の「武断政治」、「文化政治」、「大陸兵站基地化時代」について、日本による「七奪の罪」のすさまじい罪責についてなど私の『有事法制下の靖国神社』、122、123頁など参照されたい。

2

中国に対して侵略戦争をし、長期にわたって想像できないほどの加害の歴史をくり返したことについても、「関係は鏡」を心に刻み、中国に行き、その場で侵略・加害の実態を追体験することが望ましいが、良心的な発言や信頼できる書物などで、日本が中国に対して何をしたのか、なぜなのかをよく反省し、今後の責任課題にすれば、歴史の事実に基づく追体験ができるはずである。

安倍内閣にあって、驚くべき首相、閣僚、国会議員の靖国神社参拝問題が提起されているが、同じ参拝問題でも現状は余りにもひどいと言わざると得ない。公式参拝であっても平然と私人の参拝と言いつつ、しか

もマスコミもそれ以上何ら問題にしない。それどころか、稲田朋美行政改革担当大臣らは、先日の7月13日(土)に、靖国神社の「みたままつり」に合せて個人の立場でと奉納し、何も問題にすることはないと考えている。靖国神社にとって「みたままつり」(7・13)がどれほど重要な意味を持っているのか。私の『「新遊就館」ものがたり』にくわしく報告しているが、なぜ、2002年の7月13日を、「新遊就館」のオープンの日にしたのかについても、くわしく解説しているので関心のある方は読んで欲しい。靖国神社のガイドで毎年参加者に説明している通り、「新遊就館」は軍事教育施設であり、侵略戦争にかかわる展示であるにもかかわらず、すべて自衛の立場での説明と言ってよい解説だと私は思っている。

歴史的に15年戦争の最初と言われる「満州事変」(中国では正確に「9・18事変」と呼んでいる)について、侵略戦争の実態を一切思わせない書き方になっている。更に、敗戦必至の状況下の特別攻撃隊についても驚くべき説明に終始し、青年の尊い生命を空しくも天皇のため、御国のために捧げた事例なのである。

2013年6月21日例会奨励 詩篇8篇1～9節「幼子を通して力を表す神」

山本 進牧師(日本同盟基督教団馬込沢キリスト教会)

靖国神社参拝について、国会議員、公務員が参拝し、それに対し、中国、韓国が反発するという構図がずっと続いています。日本国内では私的参拝だからという意見にコントロールされているようで、あまり問題になっていません。でもこのことが、靖国神社問題の本質をついているようです。

詩篇8篇によれば、神の威光は地上だけでなく、天でも讃えられています。その偉大な神は、幼子、乳飲み子たちの口によって力が打ちたてられる(2節)ところに今日は注目します。幼子や乳飲み子たちは、偉大な神ヤーウェ、アドナイに対して人間の小ささを表すことばです。神は、敵や刃向かう者に向かって砦を築いて、防衛力を与え、また復讐、報復する敵を絶ち滅ぼす力を幼子や乳飲み子たちに与えます。

私たちは残念ながら靖国神社参拝の圧倒的な勢力の前に幼子、乳飲み子のような存在です。そして中国や韓国の抗議のメッセージは、一見日本政府には

侵略戦争の最発端とも言うべき、遠い遠い重慶大爆撃を行なった飛行機を一階の入口の部屋に展示したり、飛び立つ直前の飛行機の写真を見せたりしている遊就館の意味は一体何なのか。私は改めて、日本の国内の歴史の事実にかかわる博物館のあり方に深い関心を持ちつつ、問題点の多い博物館の現状に対して率直に不断の警告をなすべきことを痛感している。

もちろん博物館だけでなく、安倍首相始め閣僚、国会議員の多くが、今もなお侵略・加害の歴史を学ぶことなく、歴史の事実としてたとえば対中国侵略戦争の惨禍に対する個人レベルの謝罪や補償のない現状を知らないままなのである。

最後に、沖縄の伊江島の記念館に「戦前の教育の目的は侵略。戦後の教育の目的はそうであってはならない」と大書されている(西川重則著『平和を創り出すために』、166頁以下、参照)ことを報告して終わりたい(2013・7・15)。

*2013年8月30日(金)、「侵略日本、抗戦中国」と題する、王選さん、西川さんの対談形式による講演があります。ご参加を。

堪えていない幼子、乳飲み子のような発言かと思われかもしれませんが、今日の御言葉は、信仰によって、神は、幼子、乳飲み子のような私たちに言論、証しによる防衛力、打ち倒す力が与えられると勇気づけられます。

戦没者英霊信仰は、侵略された国民から、「家族を殺した人間を神として英霊として崇めることは、その遺族には受け入れられない行為である。」のではないのでしょうか。人が神となる宗教。その中でも、罪人が神になる、あるいは、罪なき自分の親族を殺した人を神とする宗教は、被害を受けた方にとっては受け入れがたいことで、国を代表する方々が参拝することは受け入れがたいことではないのでしょうか。戦没者英霊信仰は日本の一政策に過ぎず、これをもって関係国の場に出ることはできないのです。この本質を受けとめもらいたいです。

神は必ずや幼子や乳飲み子たちの口を通してその御力を打ちたててください。